

2006年10月15日模擬授業

「南から見る、北から見る - 中国とはなにか？」について、補足とアンケートからのまとめ
(アンケート記入数 30 通)

1. 中国と東アジアをどう理解するか

琉球の立場についての補足 (桃木): 「半中華」の国々の中でも、日本、朝鮮、ベトナムなど比較的大きな国では、中国コンプレックスの一方で、他の周辺諸国を見下す傾向が出やすい(本当は絶対中国にかなわないので、せめて周りの国より上位に立って威張りたい、という涙ぐましい精神状態

現代の受験戦争をふくめ、なんでも上下関係でものごとを判断するのは中国文化圏の強烈的な特徴)。これに対し、その日本に圧迫された琉球ではむしろ中国への親近感が強まった。このように、それぞれの国の歩みには、中国との一対一の関係だけでなく、多国間関係が影響する。

Q (教員): なぜ西夏は文字を作ったのか。国家としてのアイデンティティが必要だったのか？

A (佐藤): 宋・遼・金ほど広くはないが、西夏も広域な地域を支配する国家。そうした国家にとって命令や報告を文書で遠くまで伝達することは必要不可欠。はじめタングート族は独自の文字を持っていなかった。そこで建国にあたってタングート族の言葉(西夏語)を伝達する文字が必要となった。では、なぜ日本の万葉仮名のように漢字で西夏語を表現しなかったのか？そこには国家としてのアイデンティティの意図もあったであろう。隣の遼は契丹文字を既に持っていたし、西夏が服属した漢族・チベット族・ウイグル族は皆、独自の文字を持っていた。タングート族だけが持っていないのは格好がつかなかったろう。それとともに見逃せないのが、西夏語の特徴。西夏語は中国語(漢語)とはまったく違う文法を持っている(語順や格助詞がある点は日本語に似ている)。さらに音韻体系は漢語・チベット語・ウイグル語よりもはるかに複雑(母音が50種類以上もある)。これでは、万葉仮名のように西夏語を漢字で表現するにはかなり無理がある。

西夏語の数詞について補足 (佐藤): 「ゼロ」を表す西夏文字は存在していたが、「ゼロ」が計算や帳簿の記録に使われた形跡は無い。使わなくても済んでいたらしい。帳簿で「ゼロ」を表現するときは「無い」という意味の別の文字を使っていた。「101」は「一百一」、「110」は「一百(一)十」と表現したので「ゼロ」を使うことは無かった。そもそも中学英語の授業でも最初に覚える数詞は1から10までで、ゼロは教えない。

西夏の人材の登用制度について補足 (佐藤): 11世紀前半の建国段階までは、恩蔭(コネ採用)・辟召(ヘッドハンティング・スカウト)が中心だった。辟召は唐の藩鎮がやっていた(実は、西夏ももとは9世紀末に唐の藩鎮からスタートした)。国政が安定してくると恩蔭での採用が中心となったが、外戚が台頭するなどの弊害が生じ、12世紀に入ると科挙(試験採用。ただし、宋のような科挙制度であったのかどうかは不明)での採用が重視された。

「応県木塔」について補足 (佐藤): あくまでも現存する中国最古の木造建築。それ以前に木造の建物が中国に無かったわけではない。創建の年代は1056年(遼の道宗皇帝の時代)。もとの名前は「仏宮寺釈迦塔。山西省大同市の南70kmの応県という街にある。

Q (教員): ほかの大帝国もやはり多様性をもっていたのだと思うが、なぜほかの帝国は解体したのに、中国はずっと存続したのか？

A (桃木): いろいろな要素があり難しいが、「だれにでも参加でき利用できる、多様性と両立する普遍性」がいちばん高かったということではないか。ただそれ自体が、最初からあったのではなく、いろいろな民族が参加して徐々に作り上げたものだろう(漢民族自身の貢献ももちろん大きい)。

Q(社会人?): 東アジアの歴史認識をめぐる対立は、近現代のことばかり話題になるが、近世以前についてはどのくらいあるのかわからないのか？

A(桃木): 中国の「正史」や「資治通鑑」、日本の「古事記」や「日本書紀」はそれぞれ、自分に都合のよい歴史を作ろうとしている。また現代の研究者が近代以前の歴史を研究する際にも、「前期倭寇に朝鮮半島の住民が多数参加していた」という日本人学者の説に韓国人学者が猛反発するような、「現代の対立を過去に投影した対立」がある。後者については、これを解きほぐす努力が必要 [一部で国際的な話し合いも進んでいる]

2. 歴史を学ぶ意味

Q(生徒): なぜ歴史を学ぶのか、誰かの人生の例で示すなどもっと教えてほしい。教える側は教える目的を示してほしい。

コメント(生徒): 複数の見方をつきあわせる中から、その人なりの歴史観を作り出せるのではないかと。その繰り返しが議論を活性化し、歴史を厚みをもったものにするだろう。

A(桃木): 結局、歴史なんてお互いに自分の都合がいいことを言い合ってるだけだ、というふうに「逃げる」のではなく、多様性や食い違いを「楽しみながら」ベターな道をさぐってほしい。そのなかで、歴史から現代にも応用できる教訓を学ぶ、歴史の積み重ねとして現代を理解する、などいろいろな学び方が見えてくるだろう。

A(佐藤): かつて日本で「ゴジラ」というシリーズ映画が製作された(最近アメリカで製作している「ゴジラ」は、製作のコンセプトが変わってしまい、ちょっといただけない)。怪物が東京を荒らしまわり、それを退治するというストーリーだが、この映画で作者が訴えたかったのは、「問題は怪物をどうやって退治するかではなく、再び同じような怪物を生まないようにすること。怪物は過去の核実験の影響で生まれたものであるから、まず核実験の停止こそが根本的な解決だ」ということ。これを言い換えると、現状に対する場当たりの対応ではなくて、過去に人類がやってきたことを精査し反省することが問題の解決につながるということ。

あるいは病気を例にして考えてみよう。生活習慣病のように、症状を緩和する薬を飲むだけではすぐに再発してしまう病気はたくさんある。本当に治そうと思ったら、患者の過去の生活や先祖の既往症を調べて原因を突きとめないと、正しい病名や処方を決めることはできない。

歴史という学問も実は今挙げた例と似ているのではないだろうか。現在起こっている様々な社会の現象がなぜ起こっているのか、その現象は今どのような段階を迎えているのか、そして将来どうなっていくのか(どうあるべきなのか)を判断する際に過去にさかのぼって状況を調べることは、過去の失敗を繰り返さないことにもつながるだろう。ただし、そのときに気をつけなくてはならないのが、現代人の目線で過去の人々を見下さないこと。私が西夏文字と漢字のどちらが難しいかという話をしたとき、漢字をあえて旧字体(「参」を「參」)で書いた。今私たちが使っている漢字は、戦後に制定された常用漢字というかなり簡略された漢字(中国や台湾では、日本の常用漢字で筆談しても通じないことがたまにある)。宋代の漢字はもっと画数の多い旧漢字(繁体字。台湾では今も使っている)を使っていた。当時使われていた漢字と西夏文字を比べなくては意味がないのである。

アンケートの中に「北朝鮮はそんなに悪者なのか」という意見があった。このような考え方は大切なことだと思う。そしてそうした考え方を養うことができるが世界史という科目なのだろうと思う。現在、日本やアメリカの北朝鮮に対する世論は圧倒的に「ならず者国家」「打倒！暴君金正日」だが、この国の歴史を知っていればもう少し冷静になれるはず。かつて「鴨緑江以南～38度線」という狭い領域で政権が維持されたことなど一度も無い朝鮮半島の歴史、工業国を目指した北朝鮮の歴史を知っていれば、今日的情勢が単なる暴政によるものではないことを理解できよう。

3. 歴史を学ぶ方法・研究する方法

Q (生徒): 歴史を調査するとき文献の真偽はどうやって判断するのか。誇張とかもあるだろうし。

A (桃木): もともと大学で歴史学の研究方法を教える際にはそこをいちばん重視してきたのだが、最近では「本物の記録を見つけて歴史上の事実を明らかにすること」だけでなく、「偽物や誇張・ねつ造に注目し、それがなぜおこなわれたのかを調べて、作者の考えやその時代の状況を明らかにする」ことが注目されている。

A (佐藤): 古い時代の、しかも歴史書を書く習慣の無い地域(それにひきかえ、中国人は「記録魔」といいたくなるほど異常なまでにいろんなことを記述している)の研究では、記録そのものが無い、もしくは断片的である。ただ、中央ユーラシア世界の歴史ではある事件を様々な人が様々な言語で記録している場合がある。二種類以上の記述が残っていると真偽を判断しやすくなる(無論、どちらも嘘を書いているかもしれないが)。

たとえば、西夏が1227年に滅亡する時の記述について、モンゴル語の文献にはチンギス=カンが死ぬ直前「西夏の人々を根絶やしにしろ」と命令を発したと書いている。こうした記述が一人歩きし、「モンゴル人は各地で殺戮の限りを尽くした。モンゴル人は野蛮だ」とするイメージがヨーロッパで生まれた。

しかし、漢語やペルシャ語の文献には、大多数の西夏の人々はモンゴル帝国で「色目人」として破格の厚遇を受け、軍人・官僚・学者になる者もいたことが記されている。たとえば、モンゴル帝国(元朝)軍が南宋の残党を滅ぼした厓山の戦いの副大將は、西夏皇帝の一族であった李桓という人物。彼は後にベトナム遠征でモンゴル人の総大將をかばって戦死する。現在、中国の河南省や安徽省には西夏人の末裔が漢族として多数暮らしている(証明する家系図や石碑が残っている)。したがってモンゴル語の文献の記述は誇張であるか、「西夏の人々」の範囲がせいぜい西夏の皇帝とその側近・幹部クラスぐらいに限定されていたと判断することができる。

Q (他分野の学者): いろいろ細かい事実の研究が進むと教科書は書きにくくなるのではないか?

A (桃木): たしかに昔の方が単純だった。しかし自然科学がものすごく進歩して複雑になったからといって、生物や化学の教科書が書けないということにはならない。われわれも新しい知識をうまくまとめた歴史の教科書を書かねばならない。ただし、研究の進歩の中身には「いままでわからなかった法則が解明できた」というものと、「いままで信じられていた法則が実は成り立たないことが証明された」というものがある。今年のノーベル経済学賞は後者らしい。最近の歴史学の進歩にも、教科書に書いてあったことが間違いなのはわかったが、では実際にどうだったのかはまだわからない、ということがいろいろあり、その点では教科書が書きにくくなっている。マイナーな例だが、唐代の東南アジアにあったシュリーヴィジャヤと宋代の記録に出てくる三仏斎は今まで同じものだと考えられてきたが、現在はその説はこじつけで根拠薄弱だったことが明らかになっている。しかしそれなら三仏斎はなんだったのかは、いろいろな説がありよくわからない。そこで新しい研究を理解している帝国書院や東京書籍の教科書はわかりにくい記述になっている。

コメント(教員): 今日の授業のような「帝国書院教科書のサプライズ」を与えるためにはまず「山川の暗記」をしなければならない。

コメント(教員): 今日の授業は中国史の基礎知識を理解していないと聞けない。大学の授業に適しているのでは?

コメント(生徒): 印牧先生にしか教わっていないから山川とどう違うかわからない。

コメント(生徒): 新しい見方はたしかに面白いが、新しい視点と古い視点に挟まれている高校生はた

いへんである。

A (桃木): まず基礎知識を覚え、それからこういう授業でまとめをする、というやり方が正しい。各地域をタテに覚えただけでヨコに同時代を比べてみる勉強法もおなじ意味をもつ。ただしそういう基礎の暗記、タテに並べる勉強を、今までのように山ほどしないと今日の授業ができないとは断じて考えない。とくに古い知識のなかには、スクラップすべきものがたくさんある。教育界はその整理や、古い知識と新しい知識となぜ、なにが、どう違うかのわかりやすい説明などに、本気で取り組むべきである。また、中国の王朝名を殷から全部暗記していれば、今日のような考え方は知らなくても、「殷・周・春秋戦国は覚えてないが、秦・漢以後の主な王朝・時代名は覚えていて、しかもあの唐王朝には突厥人やソグド人やウイグル人がたくさん入り込んでいたと知ってる生徒」より良い点を取れると、みんなが思い込んでいるが、それを証明することは、センター入試でも不可能。

高校生のみなさん、どう思いますか？

Q (他分野の学者): 「いついつの時代には日本が中国を敵視した」とか教科書に書くけど、その日本とはだれのことが。たとえば昔の日本で文字を知らないお百姓さんが中国のことを考えて敵視するなんて、そんなことがありえたか？

A (桃木): これを**上級問題**として高校生が取り組んでもよい。その高校生は論述式入試で優秀な成績が取れる。この問題は、通常は一部の支配者とか知識人のことだけを言ってる。しかし最近の研究は、「大衆文化」(たとえば中世日本の琵琶法師や御伽草子)のなかの外国イメージなどにも向けられており、今の漫画やアニメといっしょで、そういうものがけっこう民衆の外国に対する意識に影響していたことが明らかになっている。

A (佐藤): 上の質問に直接は関係しないが、漢民族を官僚に取り立てていた西夏でも、タングート族は漢民族より上だという思想は存在した。西夏文字では漢民族を「小さい」という字と「虫」という字を組み合わせて表現していた。西夏語の詩(たぶん、口頭でも詠まれたのであろう)の中にはタングート族が勇敢で、漢民族などを少しネガティブに表現しているものもある。ただ、現実には漢民族抜きでの政権運営などできなかった。タングート族が文学の中で味わうささやかな優越感なのだろう。

感想 (阪大関係者全員): 今日来た高校生はすごい。

注意 (佐藤): アンケートに誤字がよく見られる。「講議」は誤り。「講義」が正しい。国語の試験ではバツになるので要注意! なお、私のプリントにあった遼の「二元統治体制」は、正しくは「二重統治体制」であることを改めて確認しておく。

高校生のみなさんには、上にあげたもの以外にもたくさんの感想や西夏文字をアンケートに書いていただきました。ありがとうございました。大学でも(どの学部に行っても)ぜひ、歴史や地理を勉強して下さい。